

SFC学習パターンとSECIモデル

SFC Learning patterns and the SECI model

河合昭男[†]

Akio Kawai[†]

[†] オブジェクトデザイン研究所

[†] Object Design Laboratory, Inc..

要旨

新人研修を通し、慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) 学習パターン[1][2]の活用を試みた。本来の目的とは違う場面であったが有効性が認められるパターンがあり、そこから得られた知見の報告を行う。①学習パターンは、新人研修で受講生のモチベーションや研修への取り組み姿勢の改善に有用である。②研修プロセス (座学, 演習, グループ演習, 発表) は、知識の習得という観点から SECI モデルの4つのプロセス (連結化, 内面化, 共同化, 表出化) にあてはまる。③学習パターンは、SECI モデルの4つのプロセスをカバーし、新人研修受講生の知識創造プロセスを支援する。

1. はじめに

筆者は今春新人研修の講師と講師サポートのふたつの役割を体験した。講師として改めて実感した大きな問題は、受講生の学校での学習経験や適性等の違いにより理解度にかかなりの差があることである。新人研修は3カ月程度長期に渡り、特に研修前半で落ちこぼれが出ないことが絶対条件である。全員が自信と希望を持って職場に配属され、現場の上司・先輩に職場でのOJTに受け入れられるレベルまで成長することが絶対条件である。

SFC 学習パターンのいくつかを折に触れ講師として直接受講生に伝え、講師サポートとして他の講師にも伝え、受講生のモチベーションや研修への取り組み姿勢の改善に有用であることを実感した。

2. 研修のプロセスと SECI モデル

新人研修に限らず一般的な研修スタイルの典型的なプロセスは、「座学 ⇒ 演習 ⇒ グループ演習 ⇒ 発表」のパターンである (図1)。「座学 ⇒ 演習」のサイクルを何度か繰り返し「グループ演習 ⇒ 発表」を行う。これは最後に総合演習として行うこともあれば全体プロセスの中で複数回行うこともある。

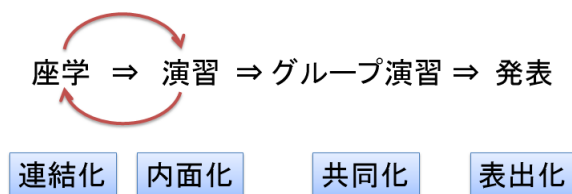


図1 研修のプロセス

このプロセスは受講生の暗黙知の形成という視点から SECI モデルにマッピングすることができる。座学は新たな形式知を取り込み各人が持っている様々な知識と連結化を図って体系化してゆく場である。ここで得られた形式知は演習を通して自分で考えることにより徐々に暗黙知として内面化されてゆく。このプロセスを何度か繰り返した後、グループ演習により各人が得た暗黙知を共同化する。グループ演習で成果物を文書化し発表を行う実践は暗黙知の表出化である。

このように研修プロセスは SECI モデルの4つの象限にきれいにあてはまる (図2)。

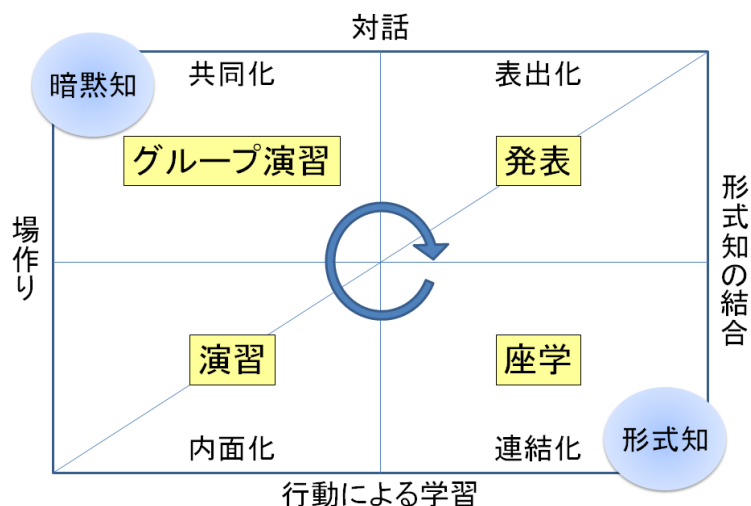


図2 研修のプロセスと SECI モデル

3. 学習パターンと SECI モデル

SFC 学習パターンは本来 SFC の学生が SFC らしい学び方を習得するための実践を支援するために作成されたものであるが、その中には本来の目的ではない一般的な研修での受講生の学び方の実践にも適用できるものが発見できる。それらのパターンについて SECI モデルの4つの象限へのマッピングを試みた。

①連結化－形式知から形式知へ

「連結化とは、コンセプトを組み合わせることで1つの知識体系を作り出す

プロセスである」「学校における教育・訓練などが、この知識変換の形をとる」[3]

研修プロセスの座学での形式知の修得を支援するための学習パターン：

まずはつかる(No.7), 「まねぶ」ことから(No.8), 教わり上手になる(No.9), 成長の発見(No.11)



まずはつかる(No.7)

②内面化－形式知から暗黙知へ

「内面化とは、形式知を暗黙知へ体化するプロセスである。それは行動による学習と密接に関連している」[3]

研修プロセスの演習を通して形式知を暗黙知とする内面化を支援するための学習パターン：

身体で覚える(No.10), 学びのなかの遊び(No.15), 自分で考える(No.25)



身体で覚える(No.10)

③共同化－暗黙知から暗黙知へ

「共同化は経験を共有することによって、メンタル・モデルや技能などの暗黙知を創造するプロセスである」[3]

研修プロセスのグループ演習を通して受講生の暗黙知の共有を支援するための学習パターン：

動きのなかで考える(No.16), フィールドに飛び込む(No.17), 偶発的な出会い(No.18)

④表出化－暗黙知から形式知へ

「表出化とは、暗黙知を明確なコンセプトに表すプロセスである。これは、暗黙知がメタファー、アナロジー、コンセプト、仮説、モデルなどの形をとりながらしだいに形式知として明示的になっていくという点で、知識創造プロセスの真髄である。」[3]

研修プロセスのグループ演習成果物発表を通して受講生の暗黙知の表出化を支援するための学習パタ

ーン：

アウトプットから始まる学び(No.13), プロトタイピング(No.14), 教えることによる学び(No.31), 魅せる力(No.34)

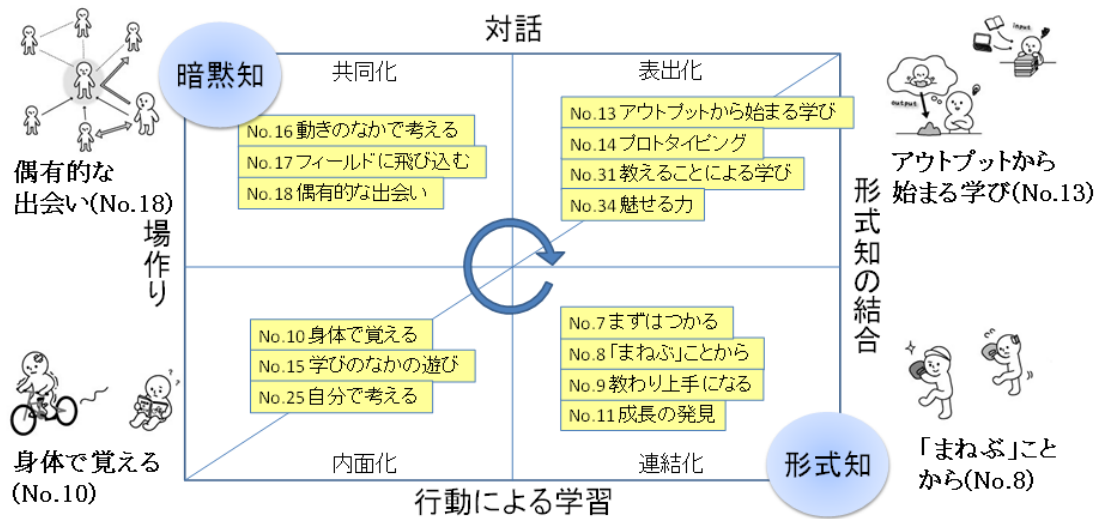


図3 学習パターンを SECI モデルで分類する

研修プロセスに関係する代表的な学習パターンを改めて図4にまとめた。

- ①座学は「まねぶ」ことから(No.8)で始まり、教わり上手になる(No.9)で一層知識の連結化を計る
- ②演習を通して自分で考える(No.25)訓練を行い、身体で覚える(No.10)で形式知の内面化を計る
- ③グループ演習は未知のメンバーとの偶発的な出会い(No.18)の場であり、演習課題を通してフィールドに飛び込む(No.17) 仮想体験を行い、暗黙知の共有を体験する。
- ④発表を通してアウトプットから始まる学び(No.13), 教えることによる学び(No.31)という暗黙知の表出を体験する。

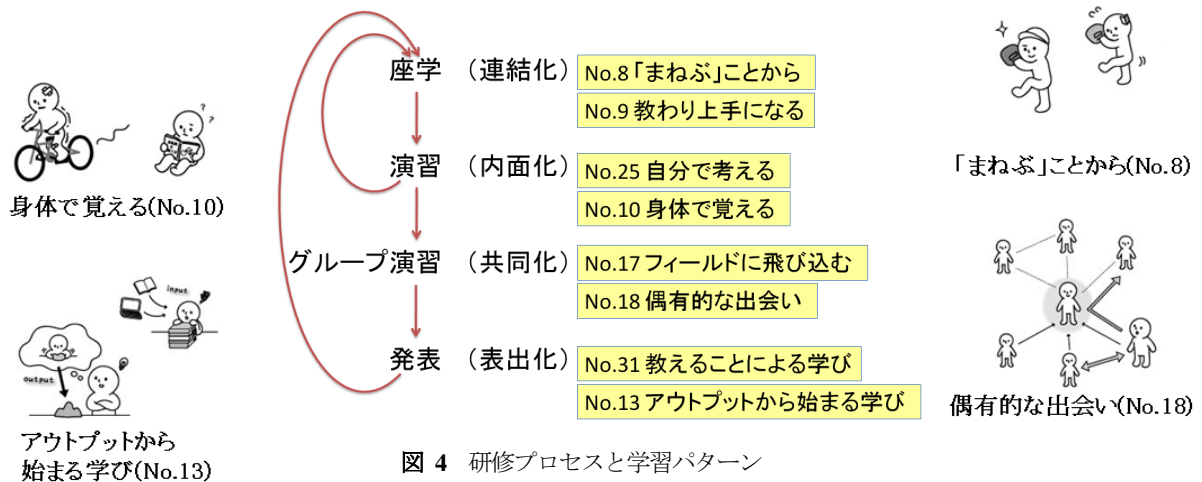


図4 研修プロセスと学習パターン

4. 学習パターンの活用

一般的に理解度の低い人ほどほとんど質問しないで分からないまま進んでしまう傾向がある。自分には理解できないと投げ出してしまふことを未然に防ぐ必要がある。そのシグナルを発見するためには受講態度の他、日々のアンケートや適宜行う理解度確認テストを利用する。個別にフォローを行うが、受講生同士で話し合った方がよく理解できることもある。今回そういった受講生に対して特に効果的だった学習パターンは次の3つである。

--

教わり上手になる (No.9) - Good Learner

他の人に「やってもらう」のではなく、上手に「教わる」と、次につながる。

教えることによる学び (No.31) - Learning by Teaching

人に何かを教えることは、自分にとってもプラスになる。

成長の発見 (No.11) - Discovery of Growth

昨日の自分と、今日の自分。そのわずかな違いに敏感になる。



成長の発見(No.11)

--

人に教えて貰うということは教える人にとってもプラスなのだからどんどん教えて貰いましょう。また自分は理解度が低いのだとひとりで思い込んでいる人も受講前の自分を振り返ってみれば随分進歩していることが分かるでしょう。自信を持ってください。

これらを折に触れ受講生に伝えることにより、質問できなかった人が講師や受講生に質問できるようになったことが受講生のアンケートや他講師からのフィードバックでも確認できた。

個人の知識形成は SECI モデルのサイクルを何度も回しつつ形式知と暗黙知を更新し、膨らませるプロセスである。教育の場は連結化による形式知修得の場である。場の受講生はその場で学んだ形式知を暗黙知として内面化し自己の知識として蓄積する。受講生のみならず場のプレーヤーである講師にも同様のプロセスがある筈である。

講師にとっては教えることによる学び (No.31)、魅せる力(No.34)を実践することは暗黙知の表出化にあたり講師としての新たな知識創造につながる。

5. おわりに

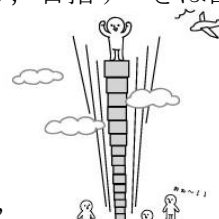
本稿の趣旨をまとめると次の3点になる。

- ①学習パターンは、新人研修で受講生のモチベーションや研修への取り組み姿勢の改善に有用である。
- ②研修プロセス（座学、演習、グループ演習、発表）は、知識の習得という観点から SECI モデルの4つのプロセス（連結化、内面化、共同化、表出化）にあてはまる。
- ③学習パターンは、SECI モデルの4つのプロセスをカバーし、新人研修受講生の知識創造を支援する。

暗黙知の発想は「我々は語ることができるより多くのことを知ることができる」[4]である。研修の場は知識習得という面から見れば、宣言的知識（形式知）を手続き的知識（暗黙知）に受講生各自が内面化することを支援することが主目的である。そこで体得した暗黙知は語りえないものであるが簡単に消えてしまうものでもない。忘れてしまうことがないことが暗黙知の特徴である。

その暗黙知は OJT でさらに膨らみ、現場での実践を通して表出化されてゆくべきものである。現場での実践を通して SECI モデルのサイクルを繰り返していると守・破・離へと心境は進み、目指すべきは自分スタイルを発見しプロフェッショナルとして突き抜ける(No.39)ことである。

本稿をきっかけに学習パターンの活用に興味を持っていただければ幸いです。



突き抜ける(No.39)

参考文献

- [1] 慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス 学習パターンプロジェクト, ”学習パターン”, <http://learningpatterns.sfc.keio.ac.jp/> (本稿の全イラスト含む)
- [2] 河合昭男, “パターン言語の分類と適用の可能性”, 情報システム学会第5回全国大会, 2009.
- [3] 野中郁次郎, 竹内弘高, ”知識創造企業”, 東洋経済, 1996
- [4] マイケル・ボラーニ, ”暗黙知の次元”, 紀伊国屋書店, 1980,